SC-IB Newsletter

ボーイスカウト茨城県連盟情報
2018.10　No.17

http://www.scout-ib.net/

◆ 山田 隆士 連盟長 ご逝去

悲しいお知らせです。

山田 隆士 連盟長が９月４日に急逝されました。

今年度の年次総会にお元気な姿を見せていたのが、つい昨日のように思い出されます。たいへん残念です。

山田連盟長は、昭和 30 年に土浦第一団にカブスカウト隊が発足した時にスカウトとして入隊し、以後、BS 隊、SS 隊（現 VS 隊）、RS 隊に上進しました。その後、土浦第一団の BS 隊、SS 隊、RS 隊の隊長を歴任し、スカウトの指導に携わりました。石岡第一団に移籍後は、団委員、団委員長を歴任し、地区役員を務めました。昭和 45 年以降は県連盟の事務局長、県コミッショナー、副理事長、理事長を歴任した後、本年５月 20 日に開催されました平成 30 年度年次総会において、全加盟員の総意により茨城県連盟第三代連盟長に推戴され、就任されました。

就任にあたって連盟長は「スカウトは“日日の善行”の先導者たれ！」として、日本連盟の初代総長であります後藤新平先生の「人のお世話にならぬよう　人のお世話をするよう　そして報いを求めぬよう」の教えの実践を述べられ、私たちに残されました。

また、日本連盟トレーナーとして、数多くの指導者講習会（現 BS 講習会）の主任講師やＷＢ研修所の所長を歴任し、指導者のレベルアップに努められました。更に、県キャンポリーやカブ・ビーバラリー等の主要な県連事業におきましても中心的な役割を担い、事業を成功裡に導いていただきました。そして、ご自身が県連盟スカウトとして初めて参加したフィリピンでの「第 10 回世界ジャンボリー」の経験をふまえ、国際人としての資質をそなえた人材の育成を目的とした県連盟海外派遣事業を推進されました。このように、連盟長は県連盟の発展・向上のために多くの功績を残されました。

５月に連盟長にご就任いただき、現在、県連盟が直面している少子化や意識の多様化、理解度の不足等々による加盟登録人員の減少に対し、これまでのご自身の経験から的確なご指導をいただけるものと期待していたところでありました。その矢先、県連盟を支える大黒柱を失ったことはたいへん残念なことであります。

ここに、心よりのご冥福をお祈りすると共に、加盟員一人ひとりが一致団結し、連盟長の意志を継いでボーイスカウト運動の発展に繋げることが、連盟長に対する永年のご努力とご苦労への感謝と御礼になるものと考えます。

連盟長、安らかにお眠りください。

山田隆士連盟長 ボーイスカウト歴

昭和 30 年～
　土浦第１団 CS 隊入隊。以後 BS 隊、SS 隊、RS 隊に所属（大学時代は慶応大学 RS 隊に所属）
昭和 36 年～
　土浦第１団、土浦第２団 BS、SS、RS 隊長等を歴任
昭和 53 年～
　石岡第１団団委員、団委員長、地区役員を歴任
昭和 45 年～
　県連盟副コミッショナー、県連盟事務局長、県連盟理事、県連盟コミッショナー、県連盟副理事長、県連盟理事長を、副連盟長を歴任
平成 30 年５月
　県連盟連盟長に推戴
平成 30 年９月４日
　ご逝去

◆ 山田隆士 連盟長を偲んで

山田隆士連盟長の足跡

副理事長　河合 敏行

山田隆士連盟長の追悼にあたり、まずスカウト歴を辿ってみたいと思います。1955 年（昭和 30 年）土浦1隊年少隊（現カブ隊）の登録原簿に「山田隆士」の名前が現れます。前年の土浦1隊・2隊の記録が残っていないため定かではありませんが、おそらくこの年に土浦で始めて年少隊が発足されたものと思われ、山田氏は 1944 年5月生まれのため 10 歳であったと推測できます。ちなみに 1949 年（昭和 24 年）に土浦第1隊少年隊（現ボーイ隊）が発足し、このときの隊付が現県連盟長老の橋本千代寿先生であり、翌年には土浦第2隊（現第2団）の少年隊隊長に就任されています。

以下、山田氏の土浦各団、隊での主な履歴です。

1957 年（昭和 32 年）　土浦第2隊　少年隊
1959 年（昭和 34 年）　第 10 回世界ジャンボリー（フィリピン）参加
1961 年（昭和 36 年）　土浦第1団　少年隊副長補
この間、大学入学とともに慶応義塾大学ローバースカウト部に所属
1966 年（昭和 41 年）　土浦第4団　少年隊隊長
第4回日本ジャンボリー（岡山県日本原）に派遣隊長として参加
土浦地区キャンポリー（湯西川）を開催
1967 年（昭和 42 年）「道標」特集号を発行（編集の中心となった）
1968 年（昭和 43 年）　土浦第1団　年長隊隊長

この後、石岡第1団へ移籍、団委員長、第4地区役員を、そして 1970 年以降は、県連盟の指導者養成委員長、事務局長、コミッショナー、理事、理事長、日本連盟の役員等も歴任されました。

1960 年代における山田氏の功績は、土浦 35 周年記念誌「亀跡」に書かれています。以下抜粋です。

『昭和 39 年の夏季キャンプより、第 1 団少年隊副長補の山田隆士氏が全隊を指導する。』この頃は土浦の各隊は、数名の指導者のもと合同で活動していました。『山田氏は、慶応ローバー隊に所属し、独自にスカウティングの研究を深めていた、山田氏の指導力はすぐれて情熱的であった。』『昭和 40 年からは、山田氏がスカウティングの輪を幾重にも拡充してゆく過程であり、この間の活動をふりかえると、実にすがすがしい感がする。』『山田氏のスカウトに対する指導を一言で表現すれば、誠を尽くしつつ基本には実に忠実であったということである。基本に忠実に、ということが、現実にはどれほど容易ではないことかと、隊指導者の方々はご承知のことであろう。また、山田氏の特筆すべきことは、指導者の養成に大変な努力をはらっていたということである。何事もリーダー会議を軸に運用された。少年隊のみならず、カブ隊指導者、時にガールスカウトの指導者たちも加わり、さながら学生指導者たちのクラブの感がある。そしてこのリーダー会議とは、若い指導者たちの勉強会の場でもあったわけである。』

山田氏を中心としたこの若い指導者のエネルギーは、1996 年から 1997 年にかけて大きく発揮されることになります。山田氏がわずか 22 歳で日本原での日本ジャンボリーに派遣隊長として参加し、また同じ年に、ジャンボリーに参加できないスカウトを中心に、石岡地区のボーイスカウト、土浦地区のガールスカウトと合同で湯西川キャンポリーを開催しています。現在のボーイ年代以上のスカウトはもちろん野営、カブスカウトやガールスカウトの年少者は、湯西川小学校に舎営という大規模な一大プロジェクトでした。

私にとって山田氏を語るうえで欠かせないものに「道標」特集号があります。主にこれらに参加したスカウト（ガールスカウトも含む）、指導者そして保護者からの寄稿で編集されています。山田氏は、土浦第4団少年隊隊長として「BS隊のページ」の最初に“今日は明日のためにある”を寄稿しています。

『湯西川キャンポリーや日本ジャンボリーは、多くの思い出を残してくれたのではなく、それは私達自身が造り出したもので、思い出は昨日のことになっても明日のために昨日を反省し、そして今日を大切にしよう。』と述べ、さらには「大自然」「規律」「技能」、「班」「班長」そして「班員」について、特に「ボーイスカウトの班」は多くの教育的効果があることを熱く語られています。そして結びは、『手と手を握って全員で頑張ろうではないか ― 明日に向けて ･･･。』

1968 年（昭和 43 年）に、幸運にして私が土浦第4団少年隊に入隊します。市内の亀城公園での集会では山田氏が開会と閉会時にあいさつされたことを覚えています。当然ですが、隊長が集会時に直接指導したりするようなことは無かった、と記憶しています。そして山田氏が育てた「班長」のもと初めての班ハイク（新入隊員の家を回るものだったと記憶しています、班長はすでに場所を知っていましたけど）、大聖寺での班キャンプ（当時はスカウトのみでした）、工業団地造成中の神立へのオーバーナイトハイク等に参加しました。その年の夏季キャンプは、第 7 回茨城県キャンポリー（取手市キャノンの森）でした。今思えば、その「班長」は実に基本に忠実で、小学校6年生の私からみると「大人」でした。おそらく多くの班長訓練を受け、班活動のたびに計画書を提出し承認されたうえで実施したものと思われます。山田氏のもとで訓練された「班長」ですから。

1970 年（昭和 45 年）、土浦第4団から分封し土浦第3団が復活、私も土浦第3団に移籍することになります。その復活時、初代のボーイ隊隊長は飯村和広氏で、前述の湯西川キャンポリーの際には派遣団隊長（山田氏は地区委員長とともに野営本部）を務めていた方でした。

おそらく、ここまでの期間で山田氏と私は言葉をかわすことは無かったと記憶しています。ローバースカウトになり県連盟トレーニングチームに所属して、またキャンポリーやジャンボリーに派遣隊指導者等として奉仕するようになって、初めてお声をかけていただいたような気がします。しかしながら、ボーイスカウトからローバースカウト、そして指導者となって指導を受けた諸先輩方は、多くが山田氏のもとで活動され、影響を受けた方です。また、トレーニングチームでの活動や山田氏が事務局長のころ、県連盟コミッショナー時代には、直接ご指導いただきました。山田氏が県連盟理事長となられてからは、副理事長の大役も仰せつかりました。

最後に、現在のボーイスカウト運動の礎を築かれ、多くの後輩指導者、そしてスカウトを残された山田隆士連盟長に深く感謝申し上げます。

ボーイスカウト茨城県連盟　指導者講習会

故 山田連盟長を偲んで

筑西第一団　団委員長　石塚 正夫

私こと、初めて会いましたのは地元においての講習会でした、最初の印象はずいぶんやせている人だなあと思いました。当時は先輩方がこの素晴らしいボーイスカウト運動を県内に広めようそれには指導者を養成しなければならないどうしたらいいか話し合いしていました。

その後茨城県連盟において第１回BS、CS研修所が開催されることになりました。山田さんはCS部門の隊長でした事前の打ち合わせ会議の席において山田さんのスカウティングに対する熱の入った話、そして、これからの青少年育成にぜひこの運動をひろげるには指導者を養成しなければ皆さん頑張ってやりましょう。その後セッション担当者と夜遅くまで打ち合わせしていたのを覚えています。

＊すごかったです！＊

第３回CS研修所２月の寒い時期に山方町家和楽青少年の家で行いました、朝礼のとき半そで、半ズボン，そして寒くて敬礼の手がのびなくてな、とよく笑い話をしていました。

ボーイスカウトが大好きな人でしたね。話をしていても企画、立案そして言葉ていねいにわかりやすくみんなに説明していました。私は山田先輩大好きでした。楽しかったですね。

仕事を辞めて時間が取れるようになって「何やっているの?」と聞きましたら「家庭菜園を始めたよ」とうれしそうにいっていたのに残念です。

今年の総会後「石塚君、知事を囲んで食事会しょうと思うだけどどうだい?」「いいじゃないやりましょう」と私はいったね。やはり常に県連をかんがえているね。ボーイスカウトの大好きな男そして先輩方のきずきあげた茨城県連盟をもっと、もっともりあげようとしていたのに、ほんとうに残念です。ご冥福をお祈り申し上げます。

故 山田連盟長の思い出

副理事長　中島 清行

昭和42年。小学校三年生を迎える春休みの３月26日。土浦市役所前広場で真新しい制服を身にまとい、必死で「カブのやくそく」と「カブ隊のさだめ」を暗記し、隊旗の下で無事にやくそくを唱えていた新入隊員を、優しく嬉しそうに眺めていたのが山田隊長でした（当時は土浦第４団のボーイ隊長）。

そして、その夏の土浦の隊と合同塩原キャンプに向かうバスの中で、「♪やまだの中の一歩足のタカシ」と歌う土浦のカブ達。「カカシじゃないのか?」と不思議に思っていましたが、それは山田連隊長のことを歌ったものだったのでした。

そして昭和54年。WB研修所CS茨城第５期に入所した時のことです。ローバーの赤のガーターをしていたところ「指導者として参加しているんだから緑のをしろ」と指摘されたのですが、持っていないことを伝えると、さっと自分のを外して貸してくれました。山田さんはご存知のとおりスリムですから、私がそれすると脚の血が止まってしまいそうでした。やはり「カカシのタカシ」なのでした。

そこで山田さんから「自ら求めてチャンスを掴め」という言葉をいただきました。「‼」それは当時の私には衝撃の言葉でした。その時から山田さんの存在がとても大きなモノとなり、その言葉は今でも私の中でしっかりと息づいて、座右の銘となっています。そして多くのスカウトたちに言葉としてそして実際のチャンスとして贈り続けています。

どんな人とどんな出会いをするか。たとえそれがホントに小さなものであったとしても、それが自分にとってどれ程の価値を生み出すものになるかもしれない。要は自分でその出会いという芽をどのように育てていくかなんだ。それが「チャンス」なんだと教えてくれました。そのチャンスはただ待っていてもやってこない。相手に知ってもらい、認めてもらってこそたくさんやってくる。それは「ちかい」を胸に「おきて」を実践することだ・・・と。

また、山田さんの隠れ家のワインバーでは、初代総長の後藤新平氏は「金を残して死ぬ者は下だ。仕事を残して死ぬ者は中だ。人を残して死ぬ者は上だ。」という言葉を遺して亡くなった。この運動は人を育てる運動だから、我々指導者は、スカウト達が自らの力で良い人生を築くことが出来るように、子どものときから意識・知識・技能・心・精神・体・態度を自ら育てることとができるよう導き・支え・励ましていくことがその役目だ。我々が教えるのではなく、スカウトが自身自分で、そして先輩を見てそれに気づき、実践することによって掴み取れるよう。そのために、指導者は自らを高めるべく、自らがそれを楽しんで実践している姿をスカウトに見せ続けることが大切なんだ。そんな「背中」を見せられるような隊長を育てることが、県連の役目だ。と熱く語っていたことを思い出します。

茨城のボーイスカウト運動が益々発展していけるよう、そして１人でも多くの人がこの運動の素晴らしさを知って、多くの子ども達に参加してもらえるよう、１人でも多くの指導者が憧れの「隊長」になっていけるよう、山田さんの教えを胸に、力を尽くして行きたいと思います。

茨城のスカウト諸君、是非とも自ら求めてチャンスを掴み、それを活かして自分を高めてください。掴んだチャンスは逃さず、結果を出すべく一生懸命に努力してください。それは地道な努力ですが、いつかは花が咲くはずです。必ずやきっと。

山田連盟長、あなたのココロと情熱、決して絶やさずに継いでいきます。

本当にありがとうございました。心よりご冥福をお祈りいたします。

第33回指導者講習会　昭和47年５月10日～14日　土浦市

◆ 第17回日本スカウトジャンボリー

暑かった。そして熱かった。

それが17NSJ、第17回日本スカウトジャンボリーのいちばんの記憶です。そんな異常な暑さにも負けず、参加したスカウトたちは大いなる成果を得、また素晴らしい思い出を胸に無事に茨城に帰ってきました。

さて、第17回日本スカウトジャンボリーは、会期8月4日～10日までの6泊7日と、これまでのジャンボリーより短くなり、原隊のままでの参加が可能となりました。これは、対象となるスカウトの数の減少により、従来のままでの大会規模ではできなくなったこと、原隊参加ということは、これまでの「2級スカウト以上」という制限がなくなり、新入スカウトでも参加できるようになったこと、社会情勢の変化により引率指導者や大会スタッフが長期の休暇を取りにくくなり支援スタッフの確保が難しくなったこと・・・等を考慮しての大会期間の短縮でした。

しかし、これまでのスカウトが持っていた「いつかはジャンボリー」という憧れの目標に向かって、普段の活動で切磋琢磨するというモチベーションが失われてしまったのかもしれません。

そうは言っても、参加したスカウトがジャンボリーから受けた刺激・感動は大変大きいものであったことに間違いはないでしょう。参加スカウトの感想文の中には、自分の将来に目標とそれへの向けた取り組みの決意にまで及んでいるものもありました。それはジャンボリーだからこそのものであると思います。

多くのスカウトが、このように自分に向かい合い、目標を持ち将来に向かって自立して進んでいける位置づけのジャンボリーであったならば、我々も考え方を修正しなくてはなりません。しかし、それを実現するためには、コミッショナーや県連・地区役員を含む全ての指導者の意識改革とそれに向けた環境整備が必須であると痛感したジャンボリーでもありました。

故 山田連盟長の座右の銘は「スカウトにチャンスを！」でした。ジャンボリーに参加したスカウトが、どれだけ多くのチャンスが得られるか…、それは引率指導者の双肩にかかっています。そして実際に参加隊指導者の多くは、スカウトにより大きなチャンスを掴ませるために本当に頑張っていました。そのためには、地区からの厚い支援が必須となるのです。果たしてそれは実現できていたのでしょうか。

さて、会場のスカウトたち、あの異常な暑さの中でもとてもエネルギッシュに活動をしていました。さすがに気温が39℃近くになったときには、大会本部から活動中止の通達が出されましたが、大きく体調を崩すスカウトもなく、大会を大いに楽しみ、心を熱くして帰途につきました。現地で見送ったバスの窓から見えるスカウトたちの顔がそれを物語っていました。

また、台風の接近、炊事の薪の配分ミスによる不足により、急遽、炊事用具の調達をしなければならない状況となったのですが、現地での調達は難しく、留守を預かる支援委員に相談したところ、海老原支援副委員長と平澤理事の迅速な対応により、翌日の昼には茨城から能登に必要十分な機材が届けられ、スカウトの生活に支障をきたさずに済むことができました。あらためて感謝申し上げます。

このように茨城参加隊全員が無事に17NSJを終えることができたのも、この17NSJに関わっていただいた全ての方々、そして応援してくれた県連の加盟員全員のおかげです。ご支援、ご協力、そして応援いただいた皆様に心から感謝を申し上げます。ありがとうございました。

（派遣団長・中島副理事長）

JAPAN

茨城県連盟第２地区
県央１隊・県央２隊
洗
県立大洗女子学園

ADC

茨城県連盟

ボーイスカウト水戸第4団

第3団

地域のために 明日のために
JA共済